

第 46 号

発行日／令和2年7月17日

編集・発行／ 明德館こんわ会

秋田市千秋明德町4-4

TEL.018(832)9220

(秋田市立中央図書館明德館内)

印刷所／秋田協同印刷株式会社

# ライフ・ライブラリー

*The Live Library*

## コロナあれこれ

会長 石黒 寿佐夫

が、ほとんどの人はマスクを着用していた。

### 三、移動制限

人から人へ感染により死に至る病気であることが明らかにになると、一ヶ所に多くの人が集まるイベント、旅行、総会、宴会等の中止の通知が連日届くようになってきた。明德館こんわ会の四月の総会も、そのような状況の中で中止せざるを得ず、会員の皆様には大変申し訳なくお詫び申し上げます。今後の行事につきましては状況を役員会にて確認しながら進めてまいりたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

### 四、人間の攻撃性（不安と恐怖）

外出の自粛や県を越えての移動の自粛が要請されている中で、秋田県内でも他県ナンバーに対し、咎め立てするような攻撃（何度もクラクションを鳴らす・執拗なパッシングライトの点滅など）があったことを知った。理不尽な攻撃を受けなくて済むならと、秋田

ナンバーに変更した人が何人もいたことも事実である。  
自分と自分の回りの人の命を守るといふ本能は善悪を越え、人と人とを分断させ、平和な時代の人々が持つていた思いやりとかお互い様などという気持ちが消滅している現状である。これもコロナの仕業なのか。

### 五、時間持ち

自粛生活で私達は、実は自分の自由に使える多くの時間を持つていないことに気付いたのではないかと。「時は金なり」であれば、多くの時間を持つている私は大金持ちでもある——と言った人がいる。慌しい元の日常に戻る前に、この貴重な時間を「思索と読書」など静かな時間として使えば、少しはコロナに仕返しが出来るかもしれないと思っている。

### 六、コロナ対峙（退治）

コロナに対する心構えとして、近寄らず、正しく恐れ、油断なく退治出来る日を待とうと思う。間違っても「With コロナ」などというメッセージは違和感があり過ぎて使ってほしくない。

--- かわいいあなたに心の灯を ---



創作童話募集ポスターより

絵・石岡圭子

## ご紹介

### 「緊急事態宣言」



明德館事務長  
佐々木 俊一

四月の人事異動により事務長となりました佐々木俊一です。

新型コロナウイルス感染症の流行により、着任後すぐにイベントを当面見合わせし、その後4日間一部利用制限を、そして全国での緊急事態宣言発出により4月18日から5月10日まで臨時休館となりました。この間、貸出カウンターへの仕切板の設置や読書学習室の椅子の間引などの感染防止対策を職員の皆さんといろいろ考え実施してまいりました。

5月12日の開館再開日には千人を超える方の利用があり図書館のニーズの高さを実感したところです。

今後も安全で安心な図書館サービスを実施してまいりますので皆様のご協力をお願いいたします。

## おうちで読書



### 『エクリュ記念号』のこと

会員 鷺 谷 美津子

「同人誌を出そうと思うんだけど……。」

と、高校時代からの友人に誘われたのは二〇〇九年のこと。彼女はロンドンに住んでいる。そこでできた友人たちや日本にいる友人たちと、書くことで繋がりたいのだという。

冊子にするとお金がかかる。でも、メールを用いた形式にすればその問題をクリアできる上に、国を越えてのやり取りも可能になる。毎号テーマを決めて書く。読



エクリュ記念号作品集1・2

み合った感想集も必ず作る。――

そんな約束事で十人ほどの仲間と始めたエッセイ集だった。誌名は「Ecrly エクリュ」（フランス語の「生成色」）。もう子どものように純白ではない。人生経験の分、生成色の織物のようでありたいとの願いを込めて付けられた。

年に二度ずつ刊行しながら、もう十年以上続いている「エクリュ」。そして五年に一度、本にもしている。この冬やっと二号が完成し、一号同様、明德館に寄贈させていただいた。

とんでもなく個性的なメンバーと共に綴り合ってきた、自分の作品・生活・人生。それらが活字になり、この建物の中に納められている。自己満足と知ってはいるが、何とも言えぬさやかな幸せと感謝に胸が温かくなるのである。（お暇がありましたら手に取ってください。同人やゲストも募集しています。）

原田マハ 作

### 『太陽の棘』に寄せて

会員 多 田 くみ子

表紙には端正な西洋人男性、まっすぐに正面を見つめる瞳に知性が漂う。裏表紙には陽に焼けた肌の東洋人男性、潤んでいるような目の輝きが印象的である。この表紙に魅かれ開いた本書は、思いがけないものだった。

終戦直後の沖縄に、東京美術学校や米国で学んだエリート芸術家たちが作る「ニシムイ」と呼ばれる芸術村があったのだ。

本書は、偶然彼らに遭遇した軍医エド・ウィルソンの目線で書かれている。一度は画家を志したところのあるエドは、彼らの高い技術と表現力に舌を巻き、次第に友情を育むことになる。しかし、占領下の沖縄で、個人の力ではどうにもならない事件が起きるのである。

私が感銘を受けたのは、本書が実在の米国人医師S・スタインバーグ博士との出会いによって書かれ、彼のニシムイコレクションが二〇〇九年、里帰りを果たしたという事実であった。

## 『十二人の手紙』から

会員 岩見 容子

コロナ禍の日々。没後10年になる作家・井上ひさしの小説の新聞広告が目飛び込んで来た。

「並んだ『手紙』が語りだす、12の人生ドラマ 前代未聞、唯一無二のミステリー。あな

たはきつと、13回、唸る。」  
 いったいどんな手紙が、どんな人生ドラマを展開し、読者はなぜ13回唸るのだろうか。

そんな思いで早速読書。

第一話「プロローグ悪魔」は、柏木幸子が、両親・担任の先生・友人・弟・社長（恋人）に当てた手紙で、人生ドラマが展開。「悪魔」の訳は、最後で納得。

第三話「赤い手」は、24通の公式文書を出生届から死亡届、洗礼証明書、婚姻届等々巧みに配列することで、不幸な生い立ちを辿った修道女が、事故死するまでの短い人生を読者の想像力でしっかりと浮上させていく。最後に25番目「そして手紙」でエリザベート園長宛に生きようとする前沢良子の手紙文が何とも言い得ない残酷さで心に迫る。不びん。

第十話「玉の輿」に登場する13

通の手紙のうち、②～⑫の11通は全て書物からの引用であることを断って、書物名を並記しているのが面白い。更に、手紙文中に秋田中央病院、秋田市千秋久保田町、秋田の酒等々の表現があり、親しみが湧いた。が、秋田県と山形県は昭和52年においても旧態依然としている旨の長田美保子の手紙には口惜しい。

第十三話「エピソード人質」

は、鹿見木堂のメモによって、12の人生ドラマの人物達が後日談の形で再登場して来るみごとな結び。柏木弘が姉幸子を思う優しさが故に再登場の人々を人質にし、思いを遂げるミステリー。

「難しいことを優しく、優しいことを深く、深いことを面白く、面白いことを真面目に、真面目なことをゆかいに、ゆかいなことは「あくまでもゆかいに」」

ずっと以前から作家・井上ひさしのこの表現を記憶していた。が、作品を初めて読み終えて、13話全てに意表を突かれ、確かにこの言葉の表現者であればこそと思いい、数々の賞を受けた作家の力を感じた作品であった。

## 読書三昧

会員 伊藤 光子

新型コロナウイルス感染防止のための自粛生活が始まり、本棚に押し込まれていた五冊の文庫本を見つけ、この機会に長編に挑戦しようと思いいちさっそく読み始めた。

それは十年ほど以前に書かれた山崎豊子作の『不毛地帯』である。山崎氏は医学界の腐敗をえぐった『白い巨塔』や、銀行業界の裏側にうごめく醜い人間の欲望を描いた『華麗なる一族』など、社会性豊かで現実感のある作品が

多い作家なのだ。

『不毛地帯』は、捕虜として想像を遙かに超える過酷な労働を強いられたシベリアでの抑留生活を経て帰還を果たし、総合会社の幹部として第二の人生を歩むことになった壱岐正のあくなき戦いを描いた一大巨編であり、山崎氏の構想力と取材力にはつくづく感服させられた。そして読者を厭きさせずにグイグイと物語の中に引きずり込むような力を感じたのは、航空史上最大の墜落事故を取材した作品、『沈まぬ太陽』を読んだ時のあの感覚と同様であった。

この作品の構想について、一、二巻はシベリアから始まる白い不毛地帯、三、四巻は石油開発で終わる赤い不毛地帯とする計画であったとあとがきで述べており、日本の繁栄を支えてきた国際商戦もまた汚辱にまみれた世界であり、荒涼たるシベリアと同じく不毛地帯であるという視点で描かれたものであるらしい。

今回の長編小説への挑戦では、家事炊事以外は何もせず、どっぴりと読書三昧の数日間を過ごさせてもらった。



① 以前、こんわ会の創作童話にも入選された医師の後藤敦子さんが作られた紙芝居です。小さい子供さんにもわかるように、楽しい絵とお話でコロナウイルスのことを説明しています。お読みになりたい方は、遊学舎で借りることができます。





## 散歩道

会員 齋藤 朗子

戦時中とあって読書に飢えていた幼児期、その心を満たしてくれたのが図書館でした。が、充実した明德館との出会いは地方と違う感動の一瞬でした。その後「明德館こんわ会」に入会し、事業の一端として、「子どもに贈る夢のおはなし」創作童話募集に応募。入選四回させていただきました。また「朗読と音楽の夕べ」（現在の「朗読と音楽のつどい」）では入選作「海をわたってきたプレゼント」が朗読されるなど、我が耳を疑うほどでした。

このような経験が出来たのは、椋鳩十の二十分間読書運動推進当時「明德館手形婦人子ども文庫」のボランティアに関わらせていただいたお陰であり、県親子読書会会長 故岩谷貞三先生から「世界に一冊しかない手作り絵本」の助手依頼を受け、お手伝いが出来た

ことも大きな要因をなしていると思っております。

母子で楽しそうに作る絵本、幸せそうな眼差しで見守る母の姿、思い出の絵本は今何処？ 楽しそうな様子に引き込まれ、私までも絵本作りに挑戦し、後に苦笑してしまいました。

手作り絵本は金では買えない宝。子どもの想像力、創作力も深められ読書への底力も養ってくれ、手作り絵本の意義を教わった気がしました。

この喜びを手形文庫の子どもたちにもと奮闘しましたが、残念ながら私が関わって十年の歳月をもって閉鎖されてしまいました。

私はお陰様でその情熱を受け継いでしまったのか、『100万回生きたねこ』のように子どもたちと共に夢を追い希望に満ちた日々を生きて行けたら嬉しい。その情熱を覚めやらないように育んでくれるこんわ会を心の支えに歩んでいる今日この頃の私なのです。



## おすすめブック



### 『日本のお弁当文化』

権代美重子／著

法政大学出版局／刊

今海外では「BENTO」がブームです。他言語の辞書にも記載され、いまや各国で様々な形で受け入れられています。本書ではそんな弁当の歴史を、日常の弁当、花見弁当、観劇弁当、駅弁、松花堂など種類ごとに掘り下げます。これらは食べる場所が違うだけではありません。日本の社会や産業が発達し、日常生活が変化していくとともに、弁当もそれぞれ携行されたその場のニーズに因應して進化していったのです。

弁当の歴史を辿ることは、日本の社会の発達を知ること——すなわち文化を知ることだと本書は訴えます。先人の努力と食への情熱に感謝しながら、今日のお弁当もおいしくいただくと思えます。

(明德館司書 小納夕子)

## お知らせ

令和二年度 事業予定

◆ 交流研修会 9月

明德館職員との話し合い

◆ 一箱古本市 10月

◆ 読書座談会 11月・1月

◆ 朗読と音楽のつどい

12月か2月

※詳細は後日ご案内致します  
多数のご参加お待ちしております。

## 編集後記

例年と異なり、ご報告すべき事業が行われないうままの会報発行となりました。そこで、こんな時こそおうちで読書を……という趣旨で、皆様から原稿をいただき、まとめてみました。

今回もご協力ありがとうございました。  
(杉山)